

わたしの戦争体験

福岡市西区 鶴田 ハツコ

もう50年、半世紀を過ぎた今でも忘れられない悪夢、今語り合える友も年を増す毎に少なくなってきた。

満州（現在、中国東北地方）北部のK開拓団に父母弟と入殖し、灯りといえばランプ、交通網も馬車かソリ、大草原の未開地、無肥料で多くの収穫を得ていました。あんな事態になるうとは、父母妹と1ヶ月毎に命を落としました。団が一つに集結し、60里の路を生死を共にチチハルまでやっとたどり着き、そこで妹、悲しむ間もなく香月収容所に入り次に母。元来もの言えぬ人で今迄の生活とは一変し地獄の様相。戦いに敗れてとはいえ納得いく説明できず、なぜ、どうしてと言いながら栄養失調（岩塩とかオカラばかりの食事で）、シラミによる発疹チフス、寒さにより死期が早まったのか息絶えました。それから父。関東倉庫で生きながら死期が近まったら臭いのか、銀ばえが寄ってきて卵を生み、体全体がむしばまれ、うじ虫によりところかまわず穴だらけ、死ぬ1週間前生気づき、人間は腹一杯たべ、めいっばい眠れる事が一番の幸だと言って。また、薄れる意識の中、向側の隅に寝ている妹とお互いにさよならと共に息絶えました。血はあらそえないなと感じました。

いつの世代でも御偉方の考えで下の者は右往左往。一たん事が起きると、一致団結し同心ではげましがんばれるが、時がたってくると我利主義に変わり、官僚のお方は一目散に南下されたときいた。コロ島から船に。病院専用だったのでどれだけの人が海に葬られたことか。日本に着いたら腹一杯御飯を食べ、思いっきり足を伸ばして眠ろう、それが願いでした。

宇品に上陸した時、最初200人位いた知人も7人しかいませんでした。皆どこでちりぢりになったのか、博多港に着いた時もコレラが発生して上陸できず、佐世保に来てもまた同じこと、九州一周して広島に、その間乗船して50日目であった。

佐世保に寄港していた時、本土を目前に尻もちついて死んでいった子供。老人と、子供の数少ない生き残り、骸骨のように口はぼっかりあけたまま上陸直前に気が狂った人もいた。日本の土に一步ふみこんだ時の嬉しさ、皆声を出して泣きました。大弁海兵団から頂いた兵隊さんの衣服をリックにつめ、持ち帰ったが二度と持ち上げれるものではなかった。我欲であったのか、途中叔母の家で体を洗って貰い、のどの所に大きなアザが、よく見るとアカである。1年以上も風呂なんてなかったもの。

収容所では、朝早く露が落ちない内に弁当箱ですくって飲んでいました。ある時は親子で食べるものの取り合い、どうせ助からないから途中で死ぬより早く死んだ方がと、最後の力を振り絞って手づかみで、普通では考えられないが断末魔ともなれば繰り返されるのである。誰がかわいいと言っても自分が一番かわいいんだとつくづく思いました。リュックの上に子供をくくり付け、手には両方荷物と子供、外の子はどうにもできません。八路軍と国府との戦いで、線路は壊され歩くしかない。道のり誰一人助けるすべもなく、旦那さんも兵隊に取られている

のだろうか。なすすべもなく成り行きを見るよりほかありません。

私が働いていた満州人の家に小さい女の子を連れてきて、姑娘（クーニャン）、この子を貰ったけど一つも口を聞かない、言語障害ではないかと言う。青白い顔、目もうつろ、お母さんは死んだとだけわかった。1ヵ月程たって見に行ったら、魚が生き返ったように小太りして、マーヤマーヤと片時も離れずとても可愛がっていて、日本語で話しても忘れていいのか、何の反応もなかった。

衣と食と住、何一つ持っていない私達。その年の冬、寒さで行き倒れる老人があちこちに見られた。その回りを中国人が集まってきて、「今日本人はこんなだけで20年もたつとまたもとのように戦を始めるのだ」とも言っていました。働いていたところの旦那さん（ジャングイ）が、「お前これを持って行け」と温かいマントウをくれた。勇気を出して人垣をかき分けて行った。もう握る力もなく手にのせて口元にやると、大きな息をついて私を凝視したまま亡くなった。その夜一晩ねむれなかった。

つい半年前、満州人と日本人、180度転換したのだ。でも50年何事もなく過ぎた。平和で暮らしも良くなった。こんなに発展すると誰が想像していただろうか。道端ででも110円入れればお茶だって飲める時代ですもの。大きな犠牲者の上になりたつての幸せである。この事をいつも忘れないようにと精進している毎日です。

多くの人を中国人に預け育てられ、今、白髪混じりの残留孤児として故郷へ逢えぬまま、また中国に帰っていらっしゃる方を見ると胸が痛みます。

もとにもどるがIさん一家全滅した。子二人肺炎と天然痘、お母さんが先に行つてすぐ来るからと腸チフス、赤便、誰もとりかえる人もない。気の強いIさん、「私はもう駄目だから貴女内地に帰りこんな目にあつて死んだと主人に伝えて欲しい」と草の上を転がってくやし泣きされた。旦那さんは召集されていた。私を絶対守るからと言つて亡くなった。尻の穴はポツカリ開いていた。

内地に着いて3ヶ月の命と言われた私も50年、人に支えられて生きて来た。丸坊主になつても暴行略奪、数多くの被害を受けた同志、誰に怒りを思いをぶつつける事ができようか、すべての人が戦争による大々的大打撃を受けたのである。その事を声を大にして叫びたい。

